

都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問い合わせは

都留文科大学附属図書館
住所: 402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話: 0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

[電子紀要トップへ](#)

期 待

第7代都留文科大学長（都留文科大学名誉教授）

上 田 薫

本学の研究紀要がついに50集を迎えたことを、心から喜びたいと思う。重ねてきた40年という歳月は、大学としてはそう長いといえぬであろうが、乗り越えてきた多くの困難と努力の結実とを思うと、古き者も新しき者も、それぞれに感慨に誘われるところがあるろう。紀要は地味な存在のようにみえて、大学の歴史の根幹にかかわっている。具眼の人はその数冊に眼を通すだけで、本質を見ぬくにちがいない。このたびのことを機縁にささやかな小見を呈し、合わせて人びと多年の労に謝したい。

さる平成10年2月28日社会学科創設10周年記念式典でした短い話の内容を、ある部分を多少敷延したかたちで記しておきたい。社会学科の創設は、私の就任後最初に手がけた大きなしごとであった。今はおかげで健かな発展をとげているといえるが、当時すでに教職への採用が狭められていくという不安が強くあって、生き残りのための切羽つまった決断をしたのであった。もちろん本学には前から地域を考える学科を目ざそうとする底流があって、このときも地域社会学科という名称を望む向きが少なくなかった。その流れは今日の社会学科にも、やはり強く受けつがれているのではないか。

しかし私がここで指摘したいのは、社会学科だけでなく大学全体の問題である。本学が特異の存在として個性豊かでなくてはならぬのは当然のことだが、それは公立大学としてそう簡単なことではない。制度の面ではなんとかできたとしても、学風を育てるとなると容易ではないのである。ただし比較的小規模の大学が東京からわずかに離れて存在するという条件は、やりようによっては案外道を開く可能性があるのではないかと、私は考えたのであった。

東京のぼう大な大学群、その有形無形の権威と圧力からずれたところに位置するというのは、たんに地理上の距離のことだけではない。マンネリ的アカデミズムから脱皮し、同時にいかにも新しげに見えるものへの追従迎合を自制しきるだけのたくましい批判的精神を、確立する足がかりが心がけによっては無理なくもてるという点で有利だということである。それは功を焦って渦中に巻

きこまれ右往左往してしまう愚を犯さぬということであり、他方なまなましい事実から一步身をそらして日和見的に点数かせぎをし、安全第一をモットーに保身につとめるといった卑屈さを自らに禁ずるということである。それをさらにつづめてごく卑近に言えば、見てくれにはこだわるまい、借物はやめようという研究姿勢、教育姿勢にほかならない。

そういうことから必然的に大切になるのは、楽な好都合なところに逃げこまぬということであろう。研究者はとかく分化に逃げやすい。抽象的な分析は一見鋭敏にみえるし、自分の立場や方向をいっそう安定させるように見えて自己満足を誘う。それに対して真の研究はそのような自足を破るもの、いわば自分に不都合なことを大事にし、つねに自己を全体に位置づけ、他とのかかわりをきびしく追究する。すなわち、総合、インテグレーションに真向うことによって成り立つ。学界にあふれるいわゆる業績主義の研究者たちは、局所的閉鎖的に場を設定してひたすら自己防衛に走るから、当然のように真剣なインテグレーションを苦手とするのである。そのとき学問は、明白に現実、とくに実践と遊離していく。

専門性の確立ということは、大学人にとって生命にも等しいと考えられるが、専門的であるということは、狭いところに安易に閉じこめることなく、必然性をもって自己の立場を破り、広く新しい立場に立てるということである。こういうことは研究者として実はイロハに属することなのだが、学界という伝統的な世界では、とかくおろそかにされやすい。そこでは個々の専門もまた一つの手段だということがわかっていないのである。もっとも個性的なものなかにこそ、普遍が生きるという根本的な理解が欠けているのである。

どんなにささやかに思えても、かならず独自の個性的視点をもつということ、どういう状況にあっても全体を生かしつなく広い視野に立った視点を保つということ、学問研究にそのことさえ可能になれば、かならず成果は実ってくる。すぐ大向うの喝采を得るかどうかはわからない。しかし派手ではなくても、輝くものは輝くのである。そしてなによりもそこで成立する教育が充実する。教育方法は多少稚拙でも、得がたい人間が育っていく。異様にきこえるであろうが、そのことのいかんが、多年の経験による私の研究者への評価である。たとえば自然科学の分野でも、人間がろくに見えないような眼でどんな深い、意味ある研究ができるか。

都留文科大学に芽生えているものを大切にしてほしいと願う。それは異色であり少数派の立場であるかもしれないけれど、来世紀にはいって、もし世界が

ほんとうに人間の幸福を強く推進する方向に動いていくなれば、むしろごくあたりまえの考えかたということになるはずである。今日人類がかかえている多くの本質的矛盾と情性を破る抜本的取り組みができないままでも、なんとか無事が保てるほど、未来はあまくないのである。